

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 12 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531242

研究課題名(和文) 特別支援学校等の教員のバーンアウトと精神健康状況に関する調査研究

研究課題名(英文) A Study on Burnout and Mental Health Conditions of Teachers in Special-Needs and Other Schools

研究代表者

坂本 裕 (SAKAMOTO, Yutaka)

岐阜大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20310039

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：教員1052名(小359,中284,高402,特457)を対象とした。精神健康状況への要配慮者は小57.10%,中56.34%,高50.24%,特52.08%であった。バーンアウト状況は<情緒的疲弊>への要配慮者は小1.67%,中3.16%,高2.47%,特2.19%。<自己成就感減少>への要配慮者は小15.04%,中21.83%,高16.42%,特14.66%であった。教員共通ストレス5因子<同僚との意見の相違><児童生徒との難しい関係><時間的圧迫><保護者との不一致><教育活動以外の業務>,教員共通コーピング4因子<気分転換><協力要請><再挑戦><発散>が確認された。

研究成果の概要(英文)：Concerning mental health conditions: teachers requiring some sort of attention included 57.10% of elementary school teachers, 56.34% of junior high school teachers, 50.24% of high school teachers, and 52.08% of special school teachers. Burnout conditions: Respondents who needed some sort of attention due to Emotional Exhaustion included 1.67% of elementary school teachers, 3.16% of junior high school teachers, 2.47% of high school teachers, and 2.19% of special school teachers. Those evidencing the need for attention with regard to Decrease in Self-Accomplishment totaled 15.04% of elementary school teachers, 21.83% of junior high school teachers, 16.42% of high school teachers, and 14.66% of special school teachers. Stressor: Differences in Opinions with Colleagues, Difficult Relationships with Students, Time Pressure, Disagreement with Parents, and Work Requirements Other than Educational Activities. Coping strategies: Change of Pace, Requesting Help, Re-challenge, and Venting.

研究分野：社会科学

キーワード：特別支援学校 教員 バーンアウト 精神健康状態

1. 研究開始当初の背景

わが国の教員の病気休職者は平成 12 年度には 4,922 人(0.53%)であったが、平成 21 年度には 8,627 人 (0.94%)と 10 年間で急増している。その内に精神疾患による者が占める割合も 46.0%から 63.3%と急増している。こうした教員のバーンアウトの研究には小・中学校・高等学校、幼稚園の教員を対象としたものはあり、実態やその対応要因が検討されている。しかし、在籍児童生徒数が急増し、最重度から軽度の多様な障害の者が在籍する特別支援学校の教員を対象としたバーンアウトの研究はない。さらに、小・中学校・高等学校、特別支援学校を同一地域で同時期に一括して調査し、校種間の比較検討を行ったバーンアウトの研究もない。加えて、教員の精神健康状況の実態調査を全校種で行った研究も見られない。

2. 研究の目的

こうした教員のバーンアウトの状況について、病気休職者率が最も高いものの、その原因や対応の検討が十分ではない特別支援学校の教員をはじめとする全校種の教員のバーンアウトと精神健康状況の実態とその対応要因が明らかになるよう、特別支援学校ならびに、小学校、中学校、高等学校の教員のバーンアウトと精神健康状況の実態調査とその対応要因の分析を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象

中部地方 A 県公立学校教員 1502 名を対象とした。

- ・小学校教員 359 名 (男 115, 女 244)
教諭 315 名, 講師 44 名
20 歳代 70 名, 30 歳代 61 名,
40 歳代 114 名, 50 歳代以上 114 名
- ・中学校教員 284 名 (男 160, 女 124)
教諭 252 名, 講師 32 名
20 歳代 79 名, 30 歳代 55 名,
40 歳代 83 名, 50 歳代以上 67 名
- ・高等学校教員 402 名 (男 273, 女 129)
教諭 374 名, 講師 28 名
20 歳代 68 名, 30 歳代 68 名,
40 歳代 117 名, 50 歳代以上 149 名
- ・特別支援学校教員 457 名 (男 116, 女 341)
教諭 292 名, 講師 165 名
20 歳代 121 名, 30 歳代 118 名,
40 歳代 114 名, 50 歳代以上 104 名

(2) 調査事項

- ・GHQ28 精神健康調査世界保健機構版
- ・日本版 BMI
- ・ストレッサーに関する内容
- ・コーピングに関する内容

(3) 方法

A 県内の小学校 19 校 490 名, 中学校 16 校 497 名, 高等学校 9 校 497 名, 特別支援学校 6 校 525 名の教員に郵送法にて依頼し, 小学校教員 359 名(73.27%), 中学校教員 284 名

(57.14%), 高等学校教員 402 名(81.38%), 特別支援学校教員 457 名(87.05%)から回答を得、全てを分析対象とした。

4. 研究成果

(1) 精神健康状況 (GHQ28)

全体傾向

小学校, 中学校, 高等学校, 特別支援学校の各教員に GHQ を適用結果は表 1 のような状況であった。精神健康状況について何らかの配慮が必要な教員が, 総得点において小学校教員 57.10%, 中学校教員 56.34%, 高等学校教員 50.24%, 特別支援学校教員 52.08%と, いずれの学校種の教員も 50%を越えていた。また, <身体症状>に何らかの配慮を必要とする小学校教員と中学校教員が 40%を越えた。教員の半数が心的疲労状況にあることが本調査からも推測された。

校種間の比較

Kruskal Wallis 法を適用したところ, <身体症状>には 4 校種間に 1%水準で有意な差がみられた。

<身体症状>で有意差があった校種

小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
小学校教員 > 高等学校教員 (P>.05)

小学校教員が特別支援学校教員, 高等学校教員よりも <身体症状>における配慮が必要な状況であった。なお, <総得点>, <不安と不眠>, <社会的活動状況>, <うつ傾向>については 4 校種間に有意な差は確認できなかった。

(2) バーンアウト状況 (日本版 BMI)

日本版 BMI の因子構造

BMI は職種によって因子構造が異なるとされているが, 教員は 2 因子, 3 因子いずれの先行研究もある。そこで, 小学校, 中学校, 高等学校, 特別支援学校の各教員に共通して使用できる因子構造を今回のデータにカテゴリカル主成分分析を適用したところ, 2 因子構造が適との結果が得られた。よって, TABLE2 に示したような 2 因子構造 <情緒的疲弊> <自己成就感減少>として本研究は進めることとした。

教員のバーンアウトの状況

【全体傾向】

小学校, 中学校, 高等学校, 特別支援学校の各教員に日本版 BMI を適用結果は <情緒的疲弊>において何らかの配慮を要する教員は小学校教員 1.67%, 中学校教員 3.16%, 高等学校教員 2.47%, 特別支援学校教員 2.19%であった。教員の 50 人に約 1 人が情緒的な疲弊に配慮すべき状況であった。

<自己成就感減少>において何らかの配慮を要する教員は小学校教員 15.04%, 中学校教員 21.83%, 高等学校教員 16.42%, 特別支援学校教員 14.66%であった。教員の 5 人から 6 人に 1 人が自己成就の減少に配慮すべき状況であった。

【校種間の比較】

Kruskal Wallis 法を適用したところ、<情緒的疲弊> <自己成就感減少>のいずれにも4校種間に1%水準で有意な差がみられた。

<情緒的疲弊>で有意差があった校種

小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
高等学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 高等学校教員 (P>.05)

小学校教員、中学校教員、高等学校教員が特別支援学校教員よりも、中学校教員が高等学校教員よりも<情緒的疲弊>が高まっている状況にあった。

<自己成就感減少>で有意差があった校種

中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.05)

中学校教員、小学校教員が特別支援学校教員よりも<自己成就感減少>が高まっている状況にあった。

(3) ストレッサー状況

教員のストレッサーの因子構造

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員に共通して適用可能なストレッサーに関する質問項目を新たに開発した。今回のデータにて探索的因子分析を適用し明らかになった因子構造を仮説的に構成し、共分散構造分析による多母集団分析を行い、構成概念妥当性を検証したところ、5因子<同僚との意見の相違> <児童生徒との難しい関係> <時間的圧迫> <保護者との不一致> <教育活動以外の業務>にて構成された。

教員が受けるストレッサーの状況

校種間の比較を確認するため Kruskal Wallis 法を適用したところ、<同僚との意見の相違> <児童生徒との難しい関係> <時間的圧迫> <保護者との不一致> <教育活動以外の業務>のいずれにも5%水準で有意な差がみられた。

<同僚との意見の相違>で有意差があった校種

小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)

小学校教員、中学校教員が特別支援学校教員よりも<同僚との意見の相違>をストレッサーとしている状況にあった。

<児童生徒との難しい関係>で有意差があった校種

中学校教員 > 小学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
高等学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)

中学校教員が他3校種の教員よりも、小学校教員、高等学校教員が特別支援学校教員よりも<児童生徒との難しい関係>をストレ

ッサーとしている状況にあった。

<時間的圧迫>で有意差があった校種

中学校教員 > 小学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
高等学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)

中学校教員が小学校教員、特別支援学校教員、小学校教員が特別支援学校教員、高等学校教員が特別支援学校教員よりも<時間的圧迫>をストレッサーとしている状況にあった。

<保護者との不一致>で有意差があった校種

中学校教員 > 小学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
小学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
特別支援学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)

中学校教員が他3校種の教員よりも、小学校教員が高等学校教員、特別支援学校教員よりも、特別支援学校教員が高等学校教員よりも<保護者との不一致>をストレッサーとしている状況にあった。

<教育活動以外の業務>で有意差があった校種

小学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)
高等学校教員 > 特別支援学校教員 (P>.01)

小学校教員、中学校教員、高等学校教員が特別支援学校教員よりも<教育活動以外の業務>をストレッサーとしている状況にあった。

(4) コーピング状況

教員のコーピングの因子構造

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員に共通して適用可能なコーピングに関する質問項目を新たに開発した。今回のデータにて探索的因子分析を適用し明らかになった因子構造を仮説的に構成し、共分散構造分析による多母集団分析を行い、構成概念妥当性を検証したところ、4因子<気分転換> <協力要請> <再挑戦> <発散>にて構成された。

教員のコーピングの状況

校種間の比較を確認するため Kruskal Wallis 法を適用したところ、<協力要請> <発散>の2因子に5%水準で有意な差がみられた。

<協力要請>で有意差があった校種

小学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
特別支援学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)

高等学校教員が他3校種の教員よりも<協
力要請>によるコーピングがなされてい
ない状況であった。

<発散>で有意差があった校種

小学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
中学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)
特別支援学校教員 > 高等学校教員 (P>.01)

高等学校教員が他3校種の教員よりも<発
散>によるコーピングがなされていない状
況であった。

(5) 対応

A県B,C市教育委員会指導主事10名,
高等学校長6名,特別支援学校長9名に教員
のバーンアウトへの対応について自由記述
方式による質問紙調査を,平成25年10月に
実施した。

4校種に共通する対応として以下の回答が
あった。

- ・職務が特定の教員に偏重しないようにする。
- ・教員のチームでの取り組みを促進する。
- ・勤務にメリハリを付け,退校しやすい雰囲気を作る
- ・夏季休業中の会議や当番を整理し,年休や代休を取得しやすくする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計4件)

坂本 裕・一門恵子,特別支援学校等教員
のバーンアウトと精神健康状況の検討,日
本教育心理学会,2012年11月7日,神戸国
際会議場(兵庫県神戸市)

坂本 裕,特別支援学校等教員のバーンア
ウトと精神健康状況の検討,日本教育心理
学会,2013年8月18日,法政大学(東京都
千代田区)

一門恵子・坂本 裕,特別支援学校等教員
のバーンアウトと精神健康状況の検討,日
本教育心理学会,2012年11月25日,琉球大
学(沖縄県西原町)

坂本 裕・一門恵子・堀田愛理,特別支援
学校等教員のバーンアウトと精神健康状況
の検討,日本教育心理学会,2012年11月
25日,琉球大学(沖縄県西原町)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 裕 (SAKAMOTO, Yutaka)
岐阜大学・教育学研究科・准教授
研究者番号: 20310039

(2) 研究分担者

一門恵子 (ICHKADO, Keiko)
九州ルーテル学院大学・人文学部・教授
研究者番号: 00040072

小山 徹 (OYAMA, Thoru)
岐阜大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 20509400

桑田弘美 (KUWATA, Hiromi)
滋賀医科大学・医学部・教授
研究者番号: 70324316

三尾 寛次 (MIO, Kanji)
岐阜大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 70706964

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

下野正代 (SIMINO, Masayo)